

除夜の鐘

平成27年12月第4週放送

「^{きよ}き^き ^{しすか}心^{しずか} ^{じよや}に越す^{かね}除夜^{ねいろ}は ^{えら}鐘^すの音色^を ^{えら}選^すび聞き澄む」

明治生まれの歌人、村瀬 廣の短歌です。

「自ら清めることにつとめてきた心を、静かに保って過ごす大晦日、除夜の鐘の音色を選び、聞いている。心は澄んでいく」といった意味になるのでしょうか。

作者が、常に心の内側を見つめている人物であろうことが、「清め来し心」という、歌の冒頭の部分から読みとることができます。

“心を清め続ける”ということは、心の影を意識し続けているということです。自分の心にある、怒りや妬み、欲望といった心の影に気づいていなければ、それを清めようとすることはできないでしょう。

作者が、怒りを覚え、相手に強い言葉を投げかけてしまったり、妬みの感情を抱き、刺すような視線を向けてしまったりした時があるとします。

その時、それに気づき、反省し、必要であれば謝り、自分の内面を、少しでも、怒りや妬み、欲望から離れたものにしていく努力を常にしているであろうことが、「清め来し心」から感じられるのです。

見つめてきた心を、静かにたもち、作者は大晦日を過ごしています。

そして、除夜の鐘が聞こえてきます。

「音色を選んで聞く」とは、一音一音耳を傾けて聞く、ということでしょう。

除夜の鐘の回数は、煩惱の数であるともいわれます。そうであるならば、除夜の鐘のひとつひとつの音は、私たちのひとつひとつの煩惱を象徴しているといってい

いでしょう。除夜の鐘が、煩惱を象徴するものであることを、おそらく作者は知っているでしょう。彼はきっと、鐘の音に耳を傾けながら、同時に、あらためて自分の内面にも、意識を向けているに違いありません。

自らの心を見つめ続ける作者が、まもなく一年が終わるという時に、「今年の私は、どんな生き方をしたろうか」「少しでも、よき生き方ができたろうか」と、鐘の音に聞き入りながら、自らを省みている情景が浮かんでいきます。

そして、そのように省みながら除夜の鐘の音を聞くことで、彼は、自分の心がより澄んでいくことを感じているのです。

「^{きよ}き^き ^{しすか}心^{しずか} ^{じよや}に越す^{かね}除夜^{ねいろ}は ^{えら}鐘^すの音色^を ^{えら}選^すび聞き澄む」

今年も、間もなく幕を閉じます。大晦日には、除夜の鐘が、低く深く響きます。

— 終 —